様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３３５４

研究課題名（和文）中世末期アルザスの世俗主題のタピスリーに関する総合的研究

研究課題名（英文）Study of the Alsatian Secular Tapestries in the Late Middle Ages

研究代表者
高木　麻紀子（Takagi, Makiko）

東京藝術大学・大学院美術研究科・研究員

研究者番号：８０７０９７６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：報告者の最終目的は中世末期の世俗美術の展開の諸相の解明である。本研究では中世末期にストラスブールを中心とするアルザス地方で制作された世俗主題のタピスリーに注目し、その図像源泉と形成、伝播、機能を、作品分析を基盤としつつ受容の観点からも考察することを目的とした。
　まず作品群のカタログ作成を通じ、当時のアルザスのタピスリーで特に人気があり且つ重要視された主題が野人であったことが浮き彫りになった。さらに中世末期の世俗図像の展開という観点から考察した結果、15世紀以降の造形芸術における野人図像の変遷において、15世紀前半のストラスブールのタピスリーが重要な媒体となっていたことが具体的に明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
西洋中世の世俗美術研究は、宗教美術研究に比して十分になされてきたとは言い難く、また、中世末期のアルザスの世俗主題のタピスリー群に特化した体系的な研究もなされていなかったため、その実態を解明すること自体、美術史学の重要な基礎研究であったといえる。
　西洋文化における「野人」の表象に関しては、文学史、文化史、そして美術史等の領域で研究の蓄積があったが、本研究では新たに、その図像変遷における15世紀前半のストラスブールのタピスリーの位置づけと意義を具体的に示すことができ、これは隣接諸学科の研究進展にも寄与する成果と考える。

研究成果の概要（英文）：The conclusive aim of my research is to understand how the secular art developed in the Occident of the late middle ages. The current research focuses on the Alsatian secular tapestries at that time and analyzes their iconographic features not only through the formal aspects but also through the perspective of the cultural milieu.
　An examination of the corpus created in this study reveals that the "wild man" was one of the most important subjects in the Alsatian tapestries. Furthermore, the iconographic analysis points out that Strasbourg tapestries in the first half of the fifteenth century occupied a prominent place in the development of the image of the wild man from the fifteenth century onward.

研究分野：西洋美術史

キーワード：西洋美術史　国際ゴシック　世俗美術　世俗図像　タペストリー　アルザス　ストラスブール　西洋中世美術

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

(1)これまでの研究史とその問題点：　キリスト教が絶対的な力をもつ西洋中世の世界では、自ずと宗教主題の芸術作品が盛んに制作されたが、後期に至ると、王侯貴族の権威伸長や都市市民の台頭のもと、より此岸的な主題を扱った芸術作品が制作されるようになった。だが、中世末期の世俗美術研究は、宗教美術研究に比して十分になされてきたとは言い難く、現在もなお、ヴァン・マルルの研究（Van Marle, R., *Iconographie de l'Art Profane au Moyen-Âge et à la Renaissance et Décoration des Demeures,* La Haye, 1931）が中世の世俗図像を体系的に扱った唯一の書という状況にある。今日では多くの作例が散逸し、全体像の解明には実際的な困難もあるが、報告者は、中世末期の世俗主題の作例は、質・量、共に宗教主題のそれに劣らず、時に革新的、先進的な表現が試みられていたと考えている。

(2)これまでの研究成果と本研究へ至る背景：　上述のような問題意識をもつ報告者の最終目標は、西洋中世末期における世俗美術の展開の諸相の解明であり、これまでは特に絵画における「狩猟図」を手掛かりに考察を進めてきた。その過程で、重要な媒体でありながら美術史的な研究が遅れている領域として、タピスリーの存在が改めて浮かび上がってきた。報告者はこれまでにも、《一角獣を伴う貴婦人》（パリ、クリュニー美術館）や、《一角獣のタピスリー》（ニューヨーク、メトロポリタン美術館クロイスターズ）等、断続的に中世末期の世俗主題のタピスリーの研究を進めており、特に後者の作例の図像には、アルザスを含む上部ライン地方で制作された工芸品との間に類縁性を認めることができた。

一方で、今回、ストラスブールを中心とするアルザス地方で制作された世俗主題のタピスリー群に焦点を絞った理由は、Ph. ロレンツ氏（ソルボンヌ大学教授）の助言に負うところが大きい。ロレンツ氏は中世の上部ライン地方の美術に造詣が深く、中世の世俗美術研究においてアルザス地方のタピスリーが恰好の対象となり得ること、また、ラップ・ブリ達によってカタログ化が進められたものの（Rapp Buri, A., Stucky-Schürer, M., *Zahm und Wild: Basler und Strassburger Bildteppiche des 15. Jahrhunderts*, Mainz, 1990）、各作例に対する個別的な研究が進んでいないことを助言してくださっていた。以上の背景から本研究課題の立案に至った。

２．研究の目的

本研究では、14 世紀末から 16 世紀初頭にかけてストラスブールを中心とするフランス北東部アルザス地方で制作されたタピスリーのなかでも、世俗的テーマをもつタピスリーに注目し、その図像的源泉と形成、展開、機能を、研究基盤の構築、それに依拠した作品分析、パトロンや受容等の制作環境の考察という観点から明らかにすることを目的とした。上述の通り、西洋中世の世俗美術研究は、宗教美術研究に比して十分になされてきたとは言い難く、また、中世末期アルザスの世俗主題のタピスリー群に特化した体系的な研究もなされていないため、その実態を解明すること自体、美術史学の重要な基礎研究である。この目的達成のために、以下の「3. 研究の方法」で記すトピックに沿って研究を進めた。

３．研究の方法

報告者は、特に以下の 3 つのトピックから研究を進めた。最終的にこれらを統括することで、不明点が多かった中世末期アルザスのタピスリーの基本情報が明らかになると共に、中世末期の世俗美術の展開におけるアルザスのタピスリーの位置づけと意義が浮かび上がることが期待されるからである。

(1)14 世紀末から 16 世紀初頭のアルザスの世俗主題タピスリーのカタログ作成：　美術史の領域においてタピスリー研究は長い間、従属的な地位に甘んじてきた。西洋中世末期の作例も、モニュメンタルな規模、量、そして図像の点でも重要な媒体であったと推察されるにも関わらず、しばしば工芸品や装飾品として価値が低く見積もられる傾向にあった。本研究で注目したアルザスのタピスリー群も本格的な

研究がなされていない状況にあったが、この地が当時の西洋におけるタピスリーの重要な生産地の 1 つであったことは間違いなく、とりわけ世俗主題をもつ作例が多いという特異性は注目に値する。そこで、まずは作品の実見調査、撮影、史資料の収集と解読に基づいたカタログ制作を急務とした。

（2）図像源泉と形成、展開―森、野人、宮廷人：（1）の結果、作品群の図像的な特質や傾向が明らかになると考えられるが、報告者が特に注目したのは、アルザスの世俗主題のタピスリーでは、とりわけ、森、野人、宮廷人が組み合わされたテーマがしばしば観察できる点である。上部ライン地方の芸術における森や野人に対する嗜好は、時に土着的な信仰やフォークロアの反映と見做されてきたが、単にそうした異教的イメジャリーとしてだけでなく、文学的ソースの存在や、宗教図像からの影響も推察される。そこで報告者は、個別に取り上げる作例を選定した上で、中世末期の世俗美術の展開という観点から、その図像源泉と形成、展開の過程を考察することを目指した。

(3)機能、受容の考察：　本研究で取り上げる世俗主題のタピスリーは、当時のアルザスの特権階級に属する人物や新興市民の私的な空間を飾っていたと推察される作例である。こうした中世の世俗建築の装飾芸術は未だ判然としない点の多い分野だが、依頼主や彼らが属する地域や階級の思想、趣味、自然観との密接な関係が予想される。それらが当時担っていた機能と受容の実態を明らかにすべく、歴史学等の隣接諸学科の成果を援用する。

４．研究成果

以下、本研究課題による成果を、「3．研究の方法」の 3 つのトピックに沿って記す。

研究方法（1）に基づく成果：各国の美術館及び研究機関の方々のご助力により、時に収蔵庫での実見が叶い、当初の想定以上に有意義な調査を行うことができた。これによりトピック（2）へ進むための基盤を築くことができた。撮影を含む実見調査を行った主な作例は以下の通りである。《城を襲撃する野人たち》（ストラスブール、1420 年頃/ニュルンベルク、ゲルマン国立博物館）、《野人を伴う宮廷恋愛場面》（ストラスブール、1420 年頃/ストラスブール大聖堂付属美術館）、《若返りの泉》（ストラスブール、1430 年頃/コルマール、ウンターリンデン美術館）、《野人とムーア人》（ストラスブール、1440 年頃/ボストン美術館）、《月暦画》（ストラスブール、1450 年頃/ロンドン、V＆A 博物館付属テキスタイル研究所）、《ノスリ》（ストラスブール、1480–90 年頃/ニューヨーク、メトロポリタン美術館クロイスターズ》、《ノスリ》（ストラスブール、1480–90 年頃/ロンドン、V＆A 博物館付属テキスタイル研究所）、バーゼル歴史博物館所蔵の一連の作例等。

研究基盤を整備した結果、ラップ・ブリ達は、ストラスブールで織られた作例の現存数を 51 点としていたものの、もう1点、追加可能と考えられる作例（《野人》15 世紀初頭/レーゲンスブルク、市立歴史博物館）が存在し、少なくとも現時点で 52 点を数えることが可能と考えられた。そして、このうちの 8 点の作例に「野人」が登場し、特に 15 世紀前半に制作された 5 点の作例はサイズも比較的大型であることが確認できた。即ち、「野人」は、現存作例数と規模の点から 15 世紀前半のストラスブールのタピスリーにおいて特に人気があり、且つ重要な主題であったといえよう。期せずして 2018 年には、その代表作《野人とムーア人》（以下、本作: 図 1）が出品された展覧会「中世の怪物たち」がニューヨーク、ピアポント・モルガン・ライブラリー・アンド・ミュージアムで開催され、最新の見解も提示された。本作は、中世末期の世俗美術におけるストラスブールのタピスリーの位置づけを吟味する上で鍵になる作例と考えられたため、個別的な研究対象として考察をすることにした。

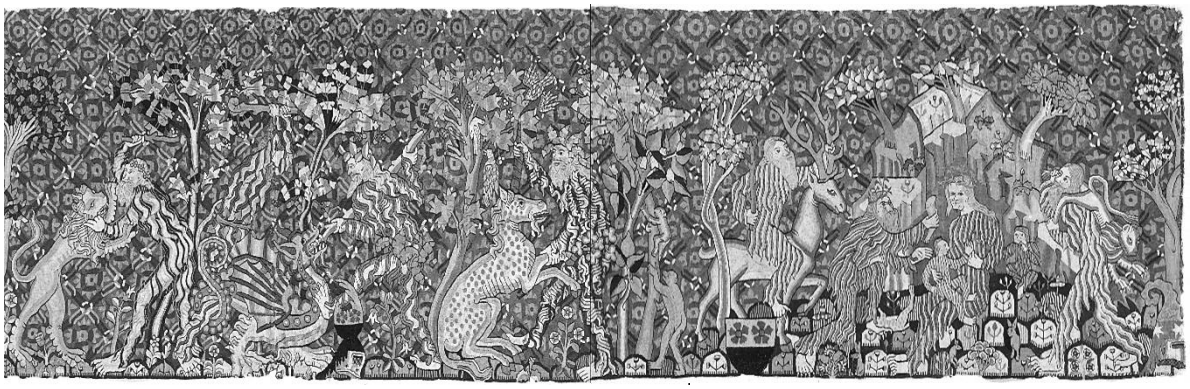
図 1 《野人とムーア人》 ストラスブール 1440 年頃 ボストン美術館

・来歴: タピスリーの下部に織られた紋章から 15 世紀にストラスブールで活躍した名門貴族の Zorn（ツォルン家）と Blümel（ブリュメル）家に纏わる作例と推察される。

・サイズ: 100 x 490 cm

・材質: 亜麻、羊毛、絹

「ムーア人の城を襲う野人」



「獅子、竜、一角獣と格闘する野人」　「母子に獲物を運ぶ野人」

研究方法（2）に基づく成果: （1）の成果により、中世末期のストラスブールの世俗主題のタピスリーにおいて、特に人気があり且つ重要であったテーマが「野人」であることが改めて浮かび上がった。そこで、その代表作例である《野人とムーア人》（図 1）を個別に取り上げ、中世末期の世俗美術の展開という観点から、その図像上の着想源と象徴的意味を検討することを試みた。

まず、注文に関する一次史料が現存しないにも関わらず、本作の制作地としてストラスブールが有力視されている理由は、様式的特徴はもちろんのこと、ストラスブールの名門貴族ツォルン家とブリュメル家の紋章がタピスリー下部に登場するからである。先行研究では、本作の「ムーア人の城を襲う野人」の図像に対し、世俗図像の「愛の城」との関連が指摘されてきた。これに対して報告者は、この特異な図像が、14 世紀フランスに遡及可能な、白い肌をもつキリスト教徒と黒い肌をもつ異教徒による戦闘場面を着想源として形成された可能性が高いこと、また、作品全体のテーマは中世後期の世俗の諸侯が育んだ愛を主柱とする宮廷文化の文脈に回収され得ると推察できることを新たに指摘した。

この考察結果を踏まえてさらに、15 世紀以降の造形芸術の分野における野人図像とその象徴の変遷における本作の位置づけを検討した。その結果、本作には後のドイツ語圏、そしてフランス語圏の造形芸術において主流となってゆく野人像の先駆的表現を見出すことが可能であることが明らかになった。つまり、ここでの野人像は、かつて付与されていた粗暴さや欲望の表象としての意味を薄め、むしろ、このやや後のドイツ語圏さらにはフランス語圏で主流となってゆく理想像としての「牧歌的野人像」の先駆的表現、換言すれば過渡的な野人の表象となっていることを示唆していると考えられるのである。このことから、15 世紀以降の造形芸術における野人図像の展開において、15 世紀前半のストラスブールのタピスリーが重要な媒体となっていたと見做すことができるだろう。

一方、15 世紀後半以降の作例では、むしろ、伝統図像を継承する傾向を強めることも判明した。この

時代の代表作《ノスリ》(図 2)も、宮廷風恋愛を基盤とし、中世の秋を意図的に懐古するかのような特徴を有しており、それは様式にも指摘できる。この特徴がアルザスの作例独自のものか、それとも同時代の世俗主題のタピスリー一般に当て嵌まるのかは次の研究課題でさらに考察したい。

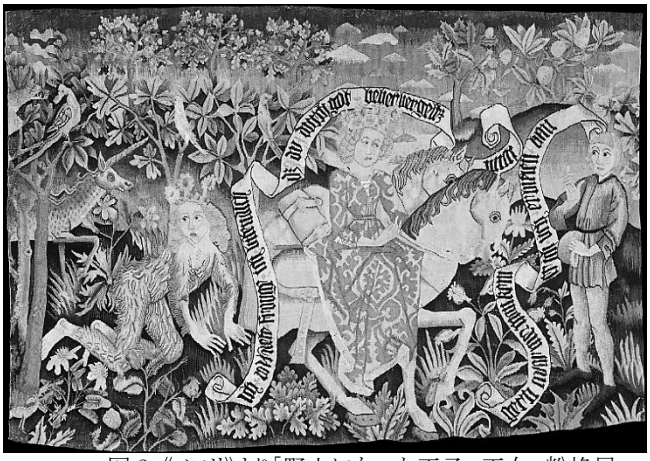


図 2《ノスリ》より「野人になった王子、王女、粉挽屋」
ストラスブール　1480-90 年頃
ニューヨーク、メトロポリン美術館クロイスターズ

研究方法(3)に基づく成果:　(2)の成果により、中世末期の野人図像の展開において 15 世紀前半のストラスブールのタピスリーが重要な役割を担っていたこと、そして《野人とムーア人》の図像は、中世末期の世俗美術において重要な主題の 1 つであった「愛」のテーマに回収し得ると考えられた。この解釈は、受容と機能という観点からも保証されるだろう。

19 世紀の歴史学者で系譜学者でもあったフォン・クノブロッホが 1885 年に上梓した『ストラスブールの黄金本』の第 2 巻には、ツォルン家の一族が 1396 年のニコポリス十字軍に参加したことが記されており、本作において同家の紋章は、まさに十字軍遠征を想起させる「ムーア人の城を襲う野人」の場面の下に付されているのである。ツォルン家は支流の多い一族であったため、タピスリーのツォルン家が十字軍に派遣されたツォルン家と直結するのかを判断するにはさらなる調査を要するが、本作の画面左にツォルン家とブリュメル家の先祖あるいは当主の紋章がまず置かれ、そして最後の愛の成就というべき「母子に獲物を運ぶ野人」の場面に両家の男女を示す紋章が配されていることを踏まえるなら、本作は両家の結婚あるいは婚約を契機に制作されたと考えるのが妥当であろう。つまり、15 世紀前半のストラスブールのタピスリーにおいて「野人」は、かつてのような粗暴さや野蛮さの象徴としてではなく、むしろ理想的、ポジティブな存在として作品に現れ始めており、また、特権階級に属するその注文主や鑑賞者にとって、彼等と容易に入れ替わり可能な存在として受容されていたと考えられるのである。

これらの研究成果のうち、特に(1)に基づく中世末期のストラスブールのタピスリーの概要に関しては日仏美術学会例会で発表した(「15 世紀前半のストラスブールにおける野人のタペストリー」日仏美術学会第 156 回例会 2020 年 1 月 11 日)。また、(2)、(3)に基づく《野人とムーア人》を中心に据えた一連の考察結果は、所属研究室紀要(「ボストン美術館のタペストリー《野人とムーア人》の図像をめぐる一考察:「中世の怪物たち」展を機に」『Aspects of Problems in Western Art History』17 号、2019 年、85- 94 頁)、西洋中世学会本大会(「15 世紀前半のストラスブールのタペストリーにおける聖俗のあわい」第 11 回西洋中世学会大会ポスター報告 2019 年 6 月 23 日)、上述の日仏美術学会例会で随時発表した。最後の発表内容は加筆修正を施した上で学会誌に投稿予定である。また、重要な関連作品である『薔薇物語』写本の挿絵に関する調査結果は研究室紀要に投稿したところである。

以上のように、本研究の成果により、未だ不明点が多かった中世末期のストラスブールを中心とするアルザスの世俗主題のタピスリーの基本情報が明らかになると共に、特に 15 世紀前半のストラスブールのタピスリーが、中世末期の世俗図像の展開において瞠目すべき役割を演じていたことが具体的に浮かび上がった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 髙木麻紀子	４．巻 16
２．論文標題 「『狩猟の書』後期写本にみる伝統と刷新：ジュネーヴ図書館Ms．fr．169を中心に」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『Aspects of Problems in Western Art History』	６．最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 髙木麻紀子	４．巻 16
２．論文標題 「曳山のタペストリー：ベルギーから来た宝物」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『Aspects of Problems in Western Art History』	６．最初と最後の頁 113-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 髙木麻紀子	４．巻 17
２．論文標題 「ボストン美術館のタペストリー《野人とムーア人》の図像をめぐる一考察 ：「中世の怪物たち」展を機に」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『Aspects of Problems in Western Art History』	６．最初と最後の頁 85-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 髙木麻紀子
２．発表標題 ガストン・フェビュスの『狩猟の書』後期写本にみる伝統と刷新：ジュネーヴ図書館Ms．fr．169を中心に
３．学会等名 美術史学会東支部例会
４．発表年 2017年

１．発表者名 髙木麻紀子
２．発表標題 15世紀前半のストラスブールのタペストリーにおける聖俗のあわい
３．学会等名 第11回西洋中世学会大会 ポスター報告（2019年6月23日）
４．発表年 2019年

１．発表者名 髙木麻紀子
２．発表標題 15世紀前半のストラスブールにおける野人のタペストリー
３．学会等名 日仏美術学会第156回例会（2020年1月11日）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

１．著者名 コーム・ファーブル、リュドヴィック・ロジェほか	４．発行年 2018年
２．出版社 日本テレビ放送網	５．総ページ数 242
３．書名 （展覧会図録）『ルーヴル美術館展――肖像芸術　人は人をどう表現してきたか』（共訳）担当箇所 pp. 191-192，197，206-207，216，220-223，226-229，232．	

１．著者名 越宏一、安藤さやか、小野迪孝、桑木野幸司、小池寿子、近藤真彫、鈴木桂子、鐸木道剛、ダーリング常田益代、髙木麻紀子、瀧本みわ、辻成史、長友瑞絵、細田あや子	４．発行年 2018年
２．出版社 竹林舎	５．総ページ数 414
３．書名 『中世美術の諸相』（ヨーロッパ中世美術論集　第5巻）	

１．著者名 髙木麻紀子	４．発行年 2020年
２．出版社 中央公論美術出版	５．総ページ数 616
３．書名 『ガストン・フェビュスの『狩猟の書』挿絵研究 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考